郷愁の人・ペイター(1)

小林定義

ウォルター・ペイター(Walter Horatio Pater, 1839-94)がそれによって文名を得た「ルネッサンス研究」(*The Studies in the History of the Renaissance*, 1873)が世に出てから百年、彼が世を去ってから八十年に近い歳月がたつが、この間、さまざまの毀誉褒貶とともに、さまざまのペイター像がわれわれの前に提出されてきている。初期の哲学、ないし人生観を中心に描かれた「唯美主義者」という像は現在もなお生きており、その批評態度から「印象批評家」というレッテルもあたえられている。一生文体の問題に腐心し、独特の文体をつくったことから、「スタイリスト」の評も得ている。道徳的なヴィクトリア朝の思想的風土の中では「快楽主義者」という悪評も得た。また、著作の多岐にわたる内容から、ある時は「文芸評論家」、あるときは「美術評論家」またあるときは「創作家」として論じられもした。(2)

このようにさまざまの角度からのペイター像が存在すること自体は、彼の多才性を物語っているようで、その限りでは問題はないかに見える。だが、「スタイリスト」としてのペイターが「印象批評家」と無関係に論じられたり、「創作家」のペイターが他のペイター像と無縁にとり扱われているという事実は否めない。その結果われわれが知っているのは、相互に関連のない「唯美主義者ペイター」であったり、「美術評論家ペイター」であったりする。言いかえれば、右にあげたようなさまざまの像の背後にあって、それらを統一するペイターその人の像が欠けているわけである。

ある時は印象批評家、あるときはスタイリスト、またある時は唯美主義者と、いろいろな衣裳をつけてわれわれの前に登場してみせるペイターの奥にある「ペイター原像」といったもの――社交界から戻って、また大学の講義を終えて、書斎に独りとなったときのペイターの胸のうち――を明らかにすることが、ペイター研究に残された重要な問題の一つではないだろうか。

「ペイター原像」の探究の一つの試みが、本稿のねらいである。

「ペイター原像」を求めるために第一にとりあげたいのは、従来から自伝的と言われている「家うちの子」(*The Child in the House*)、「享楽主義者メアリアス」(*Marius the Epicurean*)、および「エメラルド・アッスワート」(*Emerald Uthwardt*)の三つの作品である。しかし、私がこれら三作品を重視するのは、それらが単に自伝的要素を含んでいるためというより、その結末において全く同一の問題が提出されているためである。

島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)　第六巻　四五―五五頁　昭和四十七年十二月

結末が類似しているということのほかに、この三つの作品にはもう一つ共通の性格がある。それは、それぞれの作品がそれまでのペイターの著作の、いわば‘summing up’（要約）的な役割を果しているということである。「家うちの子」が発表されたのが一八七八年、「享楽主義者メアリアス」の発表は一八八五年で、両者の間に七年のへだたりはあるが、前者はペイターもその冒頭で述べているように[3]、「享楽主義者メアリアス」のための習作といっても良いもので、従って、両者は同一の発想の上に成ったものと考えられる。そうすると、これら二つの作品は一八六四年「透明性」（*Diaphaneite*）で始まって、一八九四年の「パスカル論」（*Pascal*）で終る、ほぼ三十年間のペイターの著作活動の中じきりの位置にあり、一方、「エメラルド・アッスワート」は一八九二年に「プラトンとプラトン哲学」（*Plato and Platonism*）と並行して書かれた、最晩年の著作の一つであって、これまた要約的な位置にあるといえる。これら二つの相隔たる時期の、しかし、それまでの作品の要約的な位置におかれた作品が、共通の問題をとりあげ、しかも同一の結論をあたえているということは、ペイターを考える場合、重要な意味をもつのは当然のことではないだろうか。

では、三者に共通の結末とは何か。それは郷愁である。「家うちの子」の主人公フローリアン（Florian）も、「享楽主義者メアリアス」の主人公メアリアス（Marius）も、「エメラルド・アッスワート」の主人公エメラルド（Emerald）も、その故郷との決別の仕方に違いはあるにせよ、いずれも最後に激しい郷愁に襲われる主人公たちである。彼等に共通なのは、未来にたいする希望ではなく、彼等が後にするものに対する強い思慕の情である。

「家うちの子」における主人公フローリアンの、生れ家との決別の模様から考察しよう。フローリアンはその時十二才である。十二才という歳は、ペイター自身が一八五三年、カンタベリーのキングズ・スクール（King's School）に入学のため故郷のエンフィールド（Enfield）を離れた時と同じ歳である。（この点に「家うちの子」の自伝性の一つがある。[4]）引越しのため生家を後にすることになったフローリアンは、馬車に乗ってしばらくして、大切に育てていた小鳥を置きわすれて来たことに気づき、それをとりに独り引返して行く。

They had started and gone a little way when a pet bird was found to have been left behind, and must even now——so it presented itself to him——have already all the appealing fierceness and wild self-pity at heart of one left by others to perish of hunger in a closed house; and he returned to fetch it, himself in hardly less stormy distress. But as he passed in search of it from room to room, lying so pale with a look of meekness in their denudation, and at last through that little, stripped white room, the aspect of the place touched him like the face of one dead; and a clinging back towards it came over him, so intense that he knew it would last long, and spoiling all his pleasure in the realisation of a thing so eagerly anticipated. And so, with the bird found, but himself in an agony of homesickness, thus capriciously sprung up within him, he was driven quickly away, far into the rural distance, so fondly speculated on, of that favourite country-road.[5]

彼等が家をあとにしてしばらくたった時、大事に育てていた小鳥をおきわすれてきたことに気がついた。置き去りにされた小鳥は、今ごろきっと閉めきった家の中で飢え死に対する激しい抗議の訴えを叫びつづけ、自らの運命を嘆いているにちがいない。小鳥におとらぬ激しい苦しみを覚えながら、フローリアンは小鳥をとりに引き返した。彼が鳥籠をさがしもとめて通りぬけた部屋部屋は、まるで裸にされた人間のように恥しさに蒼ざめてみえた。そして最後に入った白い子供部屋は、家具を奪われ、その表情は死人のそれのようにフローリアンの胸をうった。はげしい執著の念が彼をおそった。それは何時までも自分から離れることはないだろうと思った。あれほど待ちこがれていた引越の実現のよろこびも消えてしまった。そして、このように思いがけず彼の心にわいた郷愁のうづきに苦しめられ、楽しいはずだった旅の夢もうちこわされ、フローリアンは、なつかしい田園をあとに、鳥を抱いて馬車で運ばれて行くのであった。

「享楽主義者メアリアス」の主人公メアリアスが故郷を離れたのが何才の時であったかは定かではない。ただ、母の死の直後であったことが記されているから、ペイター自身の母が彼のキングズ・スクール入学の翌年に亡くなったことを考えあわせ、メアリアスもまたフローリアンと同じ年頃に家を後にしたと考えてよいだろう。ただ、メアリアスは出立にあたって格別の離郷の感懐はいだかない。フローリアンの場合とちがい、再びそこに戻る可能性のある出立であったからである。

だが、さまざまの精神的遍歴を経たのち、キリスト教の殉教者というかたちで死の床にある彼の胸に去来する思いは、フローリアンと全く同一の、激しい、しかも、切ない望郷の念である。キリスト教徒たちの暖かい看護をうけ、彼がそれまで閲歴した異教の世界とちがった、新しい光明をかいま見ながらも、生れ故郷への思慕の情は抑えることができないメアリアスである。

Even during those nights of delirium he had felt the scent of new-mown hay pleasantly, with a dim sense for a moment that he was lying safe in his old home. ...It was certainly a genuine clinging to life that he felt just then, at the very bottom of his mind. So it had been, obscurely, even through all the wild fancies of his delirium, from the moment which followed his decision against himself, in favour of Cornelius.[6]

幻覚におそわれる夜々、メアリアスは刈り入れたばかりの乾草の臭いを感じてうれしくなった。そして一瞬彼は、自分が幼い頃の家で横になっているのだと、もうろうとした意識の底で思った。（中略）メアリアスがその時心の奥で感じたものは、まぎれもない生への執着であった。コーニーリアスのために心にもない決断をしたその瞬間から、はげしい幻覚におそわれている間中、ぼんやりとではあったが、絶えずそのようであった。（「心にもない決断」とは、キリスト教徒弾圧で捕われたコーニーリアスの身代りとなったことを言う。筆者註。）

さて、「家うちの子」から十四年、「享楽主義者メアリアス」から七年の歳月を経て書かれた、ペイターの著作の中では最晩年に属するものの一つである「エメラルド・アッスワート」の場合を考えてみたい。

エメラルドもフローリアンやメアリアスとほぼ同じ年頃に家を離れ、寄宿舎学校に入る。四人兄弟の末っ子であるエメラルドは、兄達の教育にかまけた両親から、比較的なおざりにされて来ていた。そのためであろうか、夜半、寄宿舎で故郷への思いが訪れることがあっても、ほかの生徒たちのように、そのために涙をこぼすことはなかった。彼の心は、むしろ、世間的な功名の方に向けられているようだった。

It was reported, there was a funny belief, at school, that Aldy Uthwardt had no feeling and was incapable of tears. They never came to him certainly, when, at nights for the most part, the very touch of home, so soft, yet so indifferent to him, reached him, with a sudden opulent gush of garden perfumes; came at the rattling of the window-pane in the wind, with anything that expressed distance from the bare white walls around him here. He thrust it from him brusquely, being of a practical turn, and though somewhat sensuous, wholly without sentimentality.(7)

アルディ・アッスワートには感情がない、涙を知らぬという変な噂が伝わった。事実、たいていは夜半のことだったが、やさしい、だが彼にとっては感興をひかない故里の家の感触が、とつぜん、どっと夜の豊かな花々の匂いをともなって彼をおそったり、また、風に窓ガラスががたがた鳴って、故里の家と彼の飾り気のない白壁の部屋との距離を思わせることがあったが、そんなときにも決して涙をうかべることはなかった。実際的な性質で、いくらか感覚的とは言え、全く感傷癖に縁のなかった彼は、そうした家の感触を荒々しく払いのけてしまった。

このエメラルドが、学業半ば志願して戦場に赴く。だが功名をあせった結果、軍規違反の汚名と病める肉体をさげて故郷の家に帰る。そして病の床にふしたまま、最後の四年をそこで過ごす。その彼に、忘れていた、いや、意識的に拒んでいたといえる「家の感触」が強くよみがえる。

The original softness of his temperament, against which the sense of greater things thrust upon him had successfully reacted, asserted itself again now as he lay at ease, the ease well merited by his deeds, his sorrows. That he was going to die moved those about him to humour this mood, to soften all things to his touch; and looking back he might have pronounced those four years of doom the happiest of his life.(8)

彼が今やすらかに——彼のさまざまの行為と悲しみのつぐないとして、とうぜん彼にあたえられるべきやすらかさで——故郷の家によこたわったとき、彼にのしかかっていた巧名心がそれまで捨てさせていた生れながらの優しさがよみがえってきた。彼が死の床にあるということが周囲の人たちの胸を動かして、彼の気持をまぎらわせようとしたり、彼の手にふれるものを和らげようとする努力にかりたてた。もしも彼が過ぎこしかたをふりかえってみたなら、彼は、この死への旅路の四年間を、生涯のうちでいちばん仕合せな時期であったと、はっきり言ったであろう。

実際、生れ故郷にふたたび戻ることのできなかったフローリアンやメアリアスと比べると、死の床にありながらも、四年の間、暖かい肉身の目に見守られながら、生れ家にあったエメラルドは幸運な人間であったといえよう。

フローリアンの引越による生れ家との決別、メアリアスの異郷の地での最後、エメラルドの幸運な生れ家での死と、ペイターは三者三様の家との離別を描いてはいるが、そこに共通して流れているものは、家への限りない愛着と思慕の情である。しかもそれが、既に述べたように、ペイターの生涯の中じきりとしめっくくりといった時期の作品に見られるということは、彼がいかに「郷愁の人」であったかを示すものである。それは、「享楽主義者メアリアス」の中の次の一節が物語っているところでもある。

And as his mother became to him the very type of maternity in things, its unfailing pity and protectiveness, and maternity itself the central type of all love; so, that beautiful dwelling-place lent the reality of concrete outline to a peculiar ideal of home, which throughout the rest of his life he seemed, amid many distractions of spirit, to be ever seeking to regain.[9]

彼の母が彼にとってあらゆることの母心、その確かな慈愛と保護の典型となり、その母心があらゆる愛の中心的典型となったように、その美しい住まいは、ある独特の家の理想に具体的な姿をあたえ、彼は、そののち一生を通じて、さまざまの精神的彷徨の中にあっても、つねにそれをとり戻そうとつとめているようであった。

「さまざまの精神的彷徨」とは、メアリアスの場合「唯美主義」であり、「快楽主義」であり、「ストア哲学」であり、また「キリスト教」であるが、そうした、各時期に彼の心を奪ったものを、結局は「心をそらすもの」（'distractions'）と呼ばざるを得なかったのである。メアリアス、いや、ペイターにとって、「家」は決して離れることのできぬものであった。仮に、一時的にそこからの離反があったとしても、心は必ずそこに立ち戻ることになるわけである。ひょっとすると、「さまざまの精神的彷徨」それ自体、「家」を求めてなされるさすらいであると言えるかもしれない。エメラルドにそれが端的に示されていたようだ。

ペイターが「郷愁の人」であったことをわれわれは知った。だが、ペイターをかくまでも強い郷愁にかりたてる「家」とは、いったい、何であろう。ペイターは「家」をどのように考えていたか。ペイターの「家」とのかかわりあいはどのようであったか。

これを明らかにするのに、私たちは事欠かぬようである。なぜなら、ペイターはその著作の中で彼特有の「家」に対する考えに、かなりしばしばふれているからである。その中でも、題名が示すように「家うちの子」において、それがもっとも詳しく述べられている。

「家うちの子」はフローリアンの生家の詳細な紹介が冒頭の数ページにわたってなされる。こうしたことは、ペイターに限らず他の作家にもあることだろう。だがペイターが長々と試みたのは、単なる客観的な家の描写ではない。精神的存在ともいえる家と多感なフローリアンとの交

流である。十六世紀に建てられたフローリアンの生家は、そこに住む人たちから "the *old house*" と呼ばれていたが、それは単に、歳月を経た「古い家」であるばかりでなく、先祖たちの住んだ「昔の家」でもあり、「なつかしい家」[10]でもあって、物質的存在にとどまるものでは、決してなかったのである。長じたフローリアンはこの家を次のように回想する。

In that half-spiritualised house he [= Florian] could watch the better, over again, the gradual expansion of the soul which had come to be there —— of which indeed, through the law which makes the material objects about them an element in children's lives, it had actually become a part ; inward and outward being woven through and through each other into one inextricable texture....[11]

すでに回想の中でしか見ることができない家だけに、かえって、彼はそこに住みついた彼の魂の、次第に生長してゆく過程をいっそうはっきりと、今ふたたび目のあたりにすることができた。子供の生活において占める物質的要素の役割は大きいものだが、彼の魂は、事実その家の一部となっていた。魂と家とは互いにいく重にも織り合わされ、一つの解きほぐしがたい織布とまでなっていた……

「そこに住みついた魂」という表現にはプラトンのイディア説の影響が見られ、また、「魂と家とは互いにいく重にも織り合わされ、一つの解きほぐしがたい織布とまでなっていた」という表現は明らかに、ドイツの神秘思想家、スウェーデンボルグ（Emanuel Swedenborg, 1688－1772）に影響されている。だが、それをペイターの単なるレトリックと考えるのは間ちがいであろう。ペイターは感覚の人で、彼に対する感覚的事物の呪縛はイギリス文学にも他に例をみないほど強烈なものではあったが、[12]それが物質的呪縛にとどまらなかったことは、自然に霊を見たワーズワース（William Wordsworth, 1770－1850）に寄せた彼の共感から明らかである。[13]

家が精神的存在であることに、ペイターはもう一つの理由をあたえている。それはローマ時代に盛んであった祖霊崇拝である。たとえば「享楽主義者メアリアス」には別のような一節がある。

The urns of the dead in the family chapel received their due service. They also were now become something divine, a goodly company of friendly and protective spirits, encamped about the place of their former abode.... They loved those who brought them their sustenance ; but, deprived of these services, would be heard wandering through the house, crying sorrowfully in the stillness of the night.[14]

家の祭壇にまつられた死者たちの骨壺は、それにふさわしい礼をつくされた。彼等はまた、今ではもう神聖なもの、一団の友好的かつ保護的な魂となっていて、住まいのあたりに宿っていた。彼等はお供物を捧げる人たちを愛した。しかしそれを怠ると、夜の静けさの中で、悲しげに泣きながら家の中を歩きまわるのがきこえたものだ。

もちろん十九世紀のイギリスに生れたペイターが、二世紀のメアリアスと同じ祖霊信仰をもっていたとは考えられない。だが、十六世紀末のフランスを舞台とした小説「ガストン・ド・ラトゥール」(*Gaston de Latour*, 1888) において、ふたたびペイターは祖霊のことを物語っている。さすがに、十九世紀を背景とした「家うちの子」には、直接祖霊の存在はふれられてはいないが、「ガストン」、「メアリアス」における祖霊への言及は、ペイターが生れ家をいかに霊的存在としてとらえていたかを示すものであろう。

以上三つの作品がフィクションであって、ペイターの言うところをどこまで信用してよいか分らぬというのであれば、次の「ロゼッティ論」(*Dante Gabriel Rossetti*, 1883) には、ペイターの生まの告白が聞かれると思うが、どうであろう。

> The dwelling-place in which one finds oneself by chance or destiny, yet can partly fashion for himself; never properly one's own at all, if it be changed too lightly; in which every object has its associations——the dim mirrors, the portraits, the lamps, the books, the hair-tresses of the dead and visionary magic crystals in the secret drawers, the names and words scratched on the windows, windows open upon prospects the saddest or the sweetest; the house one must quit, yet taking perhaps, how much of its quietly active light and colour along with us!——grown now to be a kind of raiment to one's body....[15]

偶然か宿命かによって人が住みつくようになり、しかも、ある程度は自分に合わせて作り変えるものだとしても、軽々しく変えてしまったら自分のものとは言えなくなる住まいには、それ特有の連想があるものだ。曇った鏡、肖像画、ランプ、書物、亡くなった人の遺髪、秘密の引出しにある幻想的な魔法の水晶、窓に刻まれた名前や単語、時に悲しく、時に晴れやかな景色の見える窓。人は何時の日かそこを離れる宿命にあるが、その時、どれほど多くその静かな、しかも生々とした光と色彩を持ち去って行くことか。なぜなら、その時、家は肉体にとって一種の衣裳ともなっているのだから・・・・・

家と、そこに生れ育った人間の魂とが、このように密接な関係にあるものとすれば、生き別れにしろ、死別にしろ、その家と決別せねばならぬ者の不幸ほど深いものはないだろう。したがって、何かの宿命で家を離れざるをえなかった人たちが、必ず、そこに帰りたがるのは、自然なことである。たとえば、「ガストン・ド・ラトゥール」においては、どのように遠隔の地に出かけても、必ずその生れ家に立ちもどった、ガストンの先祖たちのことが物語られている。

> And as for those who kept up the central tradition of their house, they were true to the soil, coming back, under whatever obstacles, from court, from cloister, from distant crusade, to the visible spot where the memory of their kindred was loveliest and most exact——a memory, touched so solemnly with a conscience of the intimacies of life, its significant events, its contacts and partings, that to themselves it was like a second sacred history.[16]

そして、この地方の中心である彼等の家の伝統を守りつたえた人たちは、この地に対する忠実な心を失わず、どのような障害があっても、あるいは宮廷づとめから、あるいは僧院から、あるいは遠い十字軍の遠征から、その血族の記憶の鮮明な現つの場所に帰ってきた。なぜなら、その記憶は、生活の内密なことがら、意味深い出来ごと、そこに起る人との出遇いや別れ、などの意識とたいそう厳粛に結びついているので、彼等にとっては第二の聖書ともいうべきものになっていたからである。

フローリアンやメアリアスとちがって感傷に縁のない、あのエメラルドでさえ、寄宿舎学校に行くために家を離れることを、あたり前のことは考えなかったのである。

For a moment, he makes an effort to figure to himself those coming absences as but exceptional intervals in his life here....[17]

ひとときは、これから先、家を留守にすることが、そこでの生活の中で、例外的な時期にすぎないと思いこもうとつとめた。

したがって彼は、異郷の地に果てた先祖の一人に同情の念を禁ずることができない。

...Sunday after Sunday, Emerald Uthwardt reads, wondering, the solitary memorial of one soldierly member of his race, who had, —— well! who had *not* died here at home, in his bed. How wretched! how fine! how inconceivably great and difficult! —— not for him![18]

日曜日ごとにエメラルド・アッスワートは彼の先祖で軍人であった人の孤独な記録を読みふけり、驚きの気持を抑えられなかった。その先祖は自分の生れ家の、自分のベッドで死ねなかったのだ。可哀そうなことだ。だが立派だ。信じがたいほど偉大で、真似のできないことだ。とても僕にはできないことだ。

事実、エメラルドにとってこの「立派な」祖先の真似はできないことであった。前に紹介したとおり、彼は敗残の身を故郷にさらす。しかし彼は思いがけない幸福を味う。結局、エメラルドにとって真の幸福は、世に出て名を成すことではなく、生れ家にあるという、まことに平凡なことであったわけだ。

だが、この極めて平凡なことを人間は何時までも保持することが出来ようか。たしかに、エメラルドは異郷の地に果てたメアリアスや彼の祖先の軍人より仕合せではあった。だがそれは、あくまでも相対的な仕合せにとどまるものではないだろうか。何故なら、彼もまた、死という冷厳な事実によって、否応なしに家と引きはなされざるをえなかったから。もう一度、メアリアスの臨終の思いにたち返ってみたい。

幻覚におそわれる夜々、メアリアスは刈り入れたばかりの乾草の臭いを感じてうれしくなった。そして一瞬、彼は自分が昔の家で横にな

っているのだと、もうろうとした意識の底でおもった。（中略）メアリアスがそのとき心の奥で感じたものは、まぎれもない生への執著であった。（傍点筆者）

ここで、われわれは「家」への郷愁がそのまま「生」への郷愁となっていることに注目しなければならない。死にあたって「家」を思慕するとは、「家」がこの地上の「生」そのものであることだろう。したがって、離郷の苦しみは、そのまま死への恐怖ともなる。その間のペイターの考え方は「家うちの子」に次のように述べられている。

Thus far, for Florian, what all this had determined was a peculiarly strong sense of home——so forcible a motive with all of us——prompting to us our customary love of the earth, and the larger part of our fear of death, that revulsion we have from it, as from something strange, untried, unfriendly.....[19]

これまでフローリアンにとって、これらすべてのものが決定したものは異様なまでも強い家の意識であった。それは人間すべてにとって非常に強い導因となるもので、それにうながされて、われわれは常に地上の生を愛しむようになり、また、死の恐怖——不思議で、未知で、敵意のあるものとして死を嫌悪する気持——の大半もそこからうながされるものである。

また、次の「ヴィンケルマン論」（*Winckelmann*, 1867）からの一節では、"home-sickness"という言葉がそのまま、地上の生への「郷愁」の意味に用いられているといってもよいだろう。

It is with a rush of home-sickness that the thought of death presents itself. He would remain at home for ever on the earth if he could. As it loses its colour and the senses fail, he clings ever closer to it.[20]

死の思いが浮かぶと、かならず郷愁がどっと湧きおこる。出来ることなら、この地上に永遠にとどまりたいと人は願う。地上の世界が次第に色彩を失い、感覚がおとろえるにつれて、彼はますます強く地上に執著する。

このような「家」ないし「地上」への執著は、異教的なものであっても、決してキリスト教的なものではないだろう。キリスト教においても死の恐怖は説かれるが、それはあくまでも「最後の審判」との関連においてであり、死の先の、現世より仕合せな国へのパスポートを得るために説かれるのである。地上への執著という形では説かれない。だが、ペイターにとっては、たとえ天国がどのように幸福な場所であろうと、そのために地上の生の価値がうすれることはない。このことは、エメラルドの臨終の時の感情を描写した次の一節にはっきりと述べられている。

He would have liked to lie finally in the garden among departed pets, dear dogs and horses; faintly proposes it one day..... The saintly vicar visits him considerately; is repelled with politeness; goes on his way pondering inwardly what kind

of place there might be, in any possible scheme of another world, for so absolutely unspiritual a subject. In fact, as the breath of the infinite world came about him, he clung all the faster to the beloved finite things still in contact with him.

彼はそれが生きていた頃可愛がってやった犬や馬と一緒の場所に、最後には埋めてもらえたらと思い、ある日それとなく口に出した。（中略）高徳の牧師が思いやりぶかく彼を訪ねてきたが、ていよく追いかえされ、帰り道、このように信仰心のない者には、来世において住むべき場所はあたえられないだろうと考えた。事実、無限の世界の風がエメラルドの身のまわりにただよい始めると、彼はいっそう強く、その時まだ彼が身をおいている有限の世界の事物に執著したのである。

ここでは決して信心と不信心の対立など述べられてはいない。牧師を追いかえしたからと言って、エメラルドが反キリスト者であるというわけではない。対立があるとすれば、それは、死を見つめている者と見つめざる者とのそれである。牧師は、やがて自らの死を見つめざるを得なくなった時はじめて、エメラルドのこの時の心情を理解できるであろう。そして、臨終間ぎわの、次のようなメアリアスの心を己れの心とするであろう。

He had often dreamt he was condemned to die, that the hour, with wild thoughts of escape, was arrived; and waking, with the sun all around him, in complete liberty of life, had been full of gratitude for his place there, alive still, in the land of the living.

メアリアスは夢の中でしばしば死刑の宣告をうけ、処刑の時がやってくると、狂おしいほどの思いでのがれようとした。そして目が覚めると、生の完全な自由の中で、体一杯に日の光をうけ、生者の国にまだ生きながらえていることに感謝の気持で一杯になるのだった。

終生、ギリシャ、ローマの古典研究に没頭したペイターではあるが、同時に、キリスト教への接近をたえず続けた人でもあった。彼の著作中最も大部なものである「享楽主義者メアリアス」も、異教徒メアリアスのキリスト教に至る過程をたどった作品と見ることが出来よう。しかもその中心問題が、キリスト教による人間の死の救済の問題であったことは、キリスト教徒に見守られながら臨終をとげるメアリアスの、希望と迷いの中で閉じられていることからも明らかであろう。

地上の生への執著と未世への期待は、一見矛盾するかに見えるが、同時にこれほど人間らしい感情はほかにないだろう。何故なら、この二つの感情は「死」という一つの現実から引きおこされる感情であり、また、死ほど人間にとって普遍的な事実はないからである。

ペイターの文学は、一八六八年に書かれ、のちに、「ルネッサンス研究」の結語となったエッセイの中で、ヴィクトル・ユーゴー（Victor-Marie Hugo, 1802−85）の言葉を借りて述べられた、「人間はすべて不定期の執行猶予期間をあたえられた死刑囚である。われわれはわずかばかりの時間があたえられ、それがつきると、もうこの地上には存在し

なら。」(... *les hommes sont tous condamnés à mort avec des sursis indéfinis* : we have an interval, and then our place knows us no more.)[14] という哲学の上に成立した文学である。

ペイターは「郷愁の人」であった。生れ家くの、また、この地上のはかない生くの——。

(昭和四十七年七月)

〔注〕

(1) 本稿は昭和四十六年十一月二十日、慶応大学で催された「日本ペイター協会第十回のつどい」で発表した「フローリアンとメアリアスとエメラルド」に筆を加えたものである。

(2) ペイターはオックスフォードのブレイズノーズ・カレッヂ (Brasenose College) の古典学の講座をうけもっていて、「プラトンとプラトン哲学」は同大学において講ぜられ、好評をうけたものであるが、学者として評価されることはない。

(3) その箇所を引用すると、「このたまたまフローリアンを訪れた夢は、彼がその時いだいていたある企て——人がそれぞれその人自身となる精神形成過程におこる、いくつかの出来事の記録——の発端に必要なものであった。」(And it happened that this accident of his dream was just the thing needed for the beginning of a certain design he then had in view, the noting, namely, of some things in the story of his spirit—— in that process of brain-building by which we are, each one of us, what we are. *Miscellaneous Studies*, p. 173)

(4) 厳密に言えば、ペイターはシャドウェル (Shadwell) に生まれ、エンフィールドには五才から住んでいる。しかし「家うちの子」の物語は、物心つく頃から十二才までの主人公を扱っており、エンフィールドのペイターと一致する。

(5) *Miscellaneous Studies*, p. 196.

(6) *Marius the Epicurean*. vol. II, p. 216.

(7) *Miscellaneons Studies*, p. 212.

(8) *Miscellaneous Studies*, p. 240.

(9) *Marius the Epicurean* vol. I, p. 22.

(10) "old" の次の定義参照。"Used as an expression of familiarity, as in the colloq. *old boy*, *chap*, *fellow*, *man*; also, with names of places which one has long known." (*The Shorter Oxford Eniglish Dictionary*)

(11) *Miscellaneous Studies*, p. 173.

(12) 「プラトンが讃えた、あの色もなく、形もなく、触れることも出来ぬ存在と、いったい誰が色あり形ある薔薇の花弁をとり変えたいと思うか。」("Who would change the colour or curve of a rose-leaf for that. . . colourless, formless, intangible, being——Plato put so high?" (*Appreciations*, p. 68)

(13) ペイターは一八七四年、一八八九年と二度にわたって「ワーツワス論」を書いている。

(14) *Marius the Epicurean*, vol. I, pp. 10-11.

(15) *Appreciations*, p. 214.

(16) *Gaston de Latour*, p. 4.

(17) *Miscellaneous Studies*, p. 203.

(18) *Miscellaneous Studies*, pp. 200-201.

(19) *Miscellancous Studies*, p. 178.

(20) *The Renaissance*, p. 201.

(21) *Miscellaneous Studies*, p. 241.

(22) *Marius the Epicurean* vol. II, pp. 223-224.

(23) *The Renaissance*, p. 238.

(テキストはいずれも Macmillan 社の Library Edition による。)